

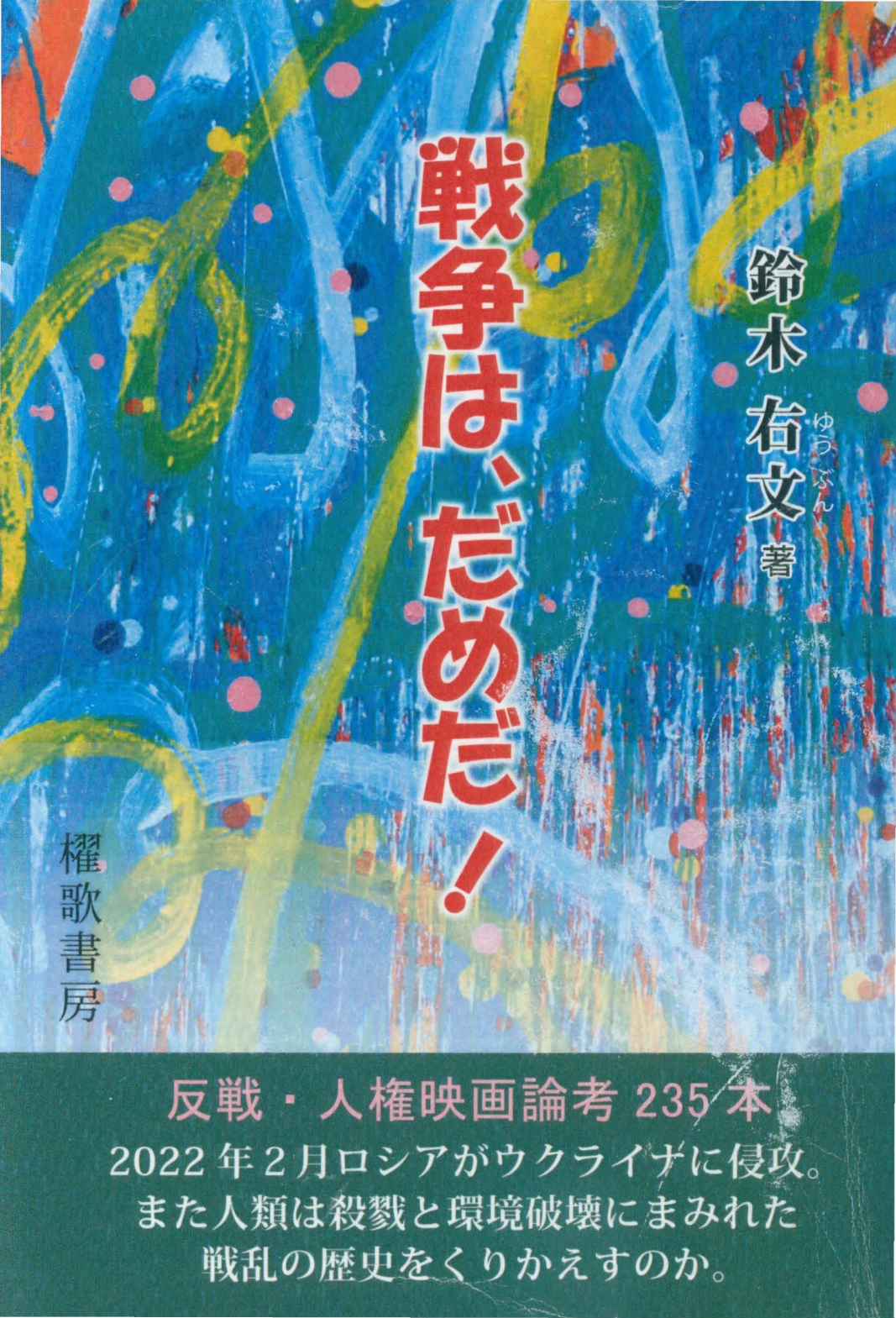
戦争は、だめだ！

鈴木，右文
九州大大学大学院言語文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7172594>

出版情報：2023-06-30. TOUKA SHOBO co., ltd.
バージョン：
権利関係：Publish content other than the main text





戦争は、だめだ！

鈴木右文 ゆうぶん 著

權歌書房

反戦・人権映画論考 235 本
2022年2月ロシアがウクライナに侵攻。
また人類は殺戮と環境破壊にまみれた
戦乱の歴史をくりかえすのか。

鈴木右文著

戦争は、だめだ！

権歌書房

前書き

2022年にロシアとウクライナの戦争が始まりました。また人類は殺戮と環境破壊にまみれた戦乱の歴史を繰り返すのかと思うと、暗澹たる気持ちでした。ロシアは非難されて当然だと確信していますが、一定年齢の男性の出国を認めないウクライナ政府に不満をぶつける国民もいました。日本も敵基地攻撃能力を持つと公言しています。世界は今制御困難な混沌とした状態にあります。何かできることはないかと思ったとき、2001年から『反戦情報』誌に連載していた反戦人権映画に関するコラムを、書籍にまとめることを思いつきました。「戦争は、良い」などと言う人は誰もいないはずです。幸い同誌編集担当の永田信男氏からは、自由にコラムの内容を使ってよく、出典等特に何の配慮も要らないとの了解を得たので、誤字脱字の修正から再度の事実確認を経て、必要と思われる箇所について現在からの視点で書き直すところまで、かなりの部分に手を入れました。さらに同誌には掲載していない作品についての書き下ろしも加え、また省いたものもあります（各記事の初出時の同誌の号数情報を省略しています）。この手の映画を頻繁に鑑賞する方々からは、よく見られている作品ばかりで物足りない、あの重要な作品が取り上げられていない、この問題についての作品はないのか、などと指摘を受けるでしょうし、この手の映画に無縁でぜひ見ていただきたい方々には、そもそも手に取っていただくことが難しいかもしれません。そう考えると、もしかしたら本書の意義は薄いのもかもしれません。しかし、戦争で大切な方々を亡くした多くの方々が、二度と戦争はごめんだとおっしゃるその思いを、そして命を失う瞬間に戦乱を恨んでおられたに違いない方々の思いを、決して風化させることはできず、今まとめなければいけない本だと思いまし

た。また、大戦等ですでに取返しのことに加担してしまった日本人の末裔として、軍事費の倍増だと言って武器保有の競争に日本が加わりうとしている今、書かずにはおれなかった本です。世界で数多くの方々が行動している今、微力ながら、そして自分でも資格があるとは到底思えないながら、その1人に加えていただきたいという願いから作りました。英語教師の私がまとめたもので、およそ大した内容ではなく、今昔の戦争を経験した方々からは生ぬるいとお叱りを受けそうですし、すでに多く世に出ている反戦や人権擁護の出版の歴史に、この程度の本で加わるのは大変おこがましいことです。取り上げたのは、気楽には作れないテーマの作品ばかりで、それだけにいろいろと批判を受けた作品もありますが、そうした点までは正直なところ、カバーできておりません。しかし、筆者の力量では現実問題これ以上の取組は難しそうです。蟬螂の斧の如き反戦の志をくんでいただき、御容赦くださったら幸いです。

なお本書では、作品の得た賞について、米国アカデミー賞、カンヌ国際映画祭、ベネチア国際映画祭を基本に登場願っており（作品賞、脚本賞などの賞の種類については、メジャーなものに限っています）、必要に応じて他にも言及しています。制作国については、情報源によって微妙に異なっていることもあるため、原則として *Internet Movie Database* によるものを使用しています。副題は、主題との間に全角スペースを入れることでほぼ統一しました。また、本書は作品を紹介する一般書を志しており、特段の引用情報の付加が必要と思われるような引用はほとんどしておりません。参考文献も特に挙げていません。そのような随筆的な本ですが、少しでも何かのお役に立つことを祈るばかりです。

目次

各作品の「年」は日本での一般公開年であるが、『キネマ旬報』誌でベストテン評価の対象が翌年扱いになっている場合は、公開の翌年としている。またタイトルが長い場合は、目次と各ページの見出しにおいて副題を省略している場合がある。また本文中で、本書で扱っている作品名には*を付した(そのページで主題として扱っている作品には付していない)。

序

1934年『街の灯』	11	1952年『原爆の子』	25
1937年『新しき土』	14	1952年『虎の尾を踏む男達』	26
1944年『陸軍』	15	1953年『ひめゆりの塔』	27
1946年『大曾根家の朝』	16	1954年『二十四の瞳』	28
1946年『わが青春に悔いなし』	17	1955年『生きものの記録』	29
1947年『安城家の舞踏会』	18	1955年『浮草日記』	30
1949年『ミニヴァー夫人』	19	1955年『ここに泉あり』	31
1950年『暴力の街』	20	1957年『喜びも悲しみも幾歳月』	32
1950年『また逢う日まで』	21	1959年『キクとイサム』	33
1950年『無防備都市』	22	1959年『荷車の歌』	34
1952年『生きる』	23	1959年『ニューヨークの王様』	35
	24	1960年『チャップリンの独裁者』	36

戦争は、だめだ！

1960年『笛吹川』	37	1982年『ミッシング』	57
1963年『アラバマ物語』	38	1983年『ソフイーの選択』	58
1963年『僕の村は戦場だった』	39	1985年『キリング・フィールド』	59
1964年『博士の異常な愛情』	40	1986年『海と毒薬』	60
1965年『赤ひげ』	41	1986年『カラー・パープル』	61
1967年『わが命つきるとも』	42	1987年『プラトーン』	62
1967年『若者たち』	43	1988年『さくら隊散る』	63
1968年『猿の惑星』	44	1988年『さよなら子供たち』	64
1968年『招かれざる客』	45	1988年『遠い夜明け』	65
1969年『ひとりっ子』	46	1988年『TOMORROW明日』	66
1970年『家族』	47	1988年『ニュー・シネマ・パラダイス』	67
1970年『Z』	48	1989年『紅いコリャン』	68
1973年『三里塚辺田部落』	49	1989年『黒い雨』	69
1974年『サンダカン八番娼館・望郷』	50	1990年『風の輝く朝に』	70
1978年『原子力戦争』	51	1990年『7月4日に生まれて』	71
1979年『あゝ野麦峠』	52	1991年『無防備都市 ベイルートからの証言』	72
1979年『安重根伊藤博文を撃つ』	53	1992年『JFK』	73
1980年『地獄の黙示録』	54	1993年『インドシナ』	74
1982年『転校生』	56		

1993年『月光の夏』
 1993年『友だちのうちはどこ?』
 1994年『キルソドム』
 1994年『シンドラーのリスト』
 1994年『太白山脈』
 1995年『エイジアン・ブルー』
 1995年『ショーシャンクの空に』
 1995年『太陽に灼かれて』
 1996年『イル・ポストイノ』
 1996年『ビフォア・ザ・レイン』
 1996年『ユリシイズの瞳』
 1997年『タイタニック』
 1997年『ナージャの村』
 1998年『アミスタッド』
 1999年『ライフ・イズ・
 ビューティフル』
 2000年『初恋のきた道』
 2001年『エリン・ブロボッチ』
 2001年『JSA』

92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75

2001年『蝶の舌』
 2001年『ホタル』
 2002年『鬼が来た!』
 2002年『KT』
 2002年『戦場のピアニスト』
 2002年『チョムスキー9・11』
 2003年『美しい夏キリシマ』
 2003年『こんばんは』
 2003年『ボウリング・フォー・
 クロンバイン』
 2004年『華氏911』
 2004年『スーパースイズ・ミー』
 2004年『誰も知らない』
 2004年『父と暮せば』
 2004年『モーターサイクル・
 ダイアリーズ』
 2005年『映画日本国憲法』
 2005年『男たちの大和』
 2005年『ヒトラー 最後の12日間』

111 109 108 107 106 105 104 103 101 100 99 98 97 96 95 94 93

戦争は、だめだ！

2006年	『蟻の兵隊』	113
2006年	『父親たちの星条旗』	114
2006年	『硫黄島からの手紙』	115
2006年	『紙屋悦子の青春』	116
2006年	『グッドナイト&グッドラック』	117
2006年	『出口のない海』	118
2006年	『トンマツコルへようこそ』	119
2006年	『ナイロビの蜂』	120
2006年	『ホテル・ルワンダ』	121
2006年	『麦の穂をゆらす風』	122
2007年	『陸に上がった軍艦』	123
2007年	『君の涙ドナウに流れ』	124
2007年	『グアンタナモ、 僕たちが見た真実』	125
2007年	『シッコ』	126
2007年	『新・あつい壁』	127
2007年	『特攻 TOKKO』	128
2007年	『ヒロシマナガサキ』	129
2007年	『不都合な真実』	130

130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113

2007年	『ミリキタニの猫』	131
2007年	『善き人のためのソナタ』	132
2007年	『夕風の街 桜の国』	133
2007年	『ルワンダの涙』	134
2008年	『おくりびと』	136
2008年	『母べえ』	137
2008年	『今夜、列車は走る』	138
2008年	『実録・連合赤軍』	139
2008年	『トウキョウソナタ』	140
2008年	『ヒトラーの贗札』	141
2008年	『マンデラの名もなき看守』	142
2008年	『闇の子供たち』	143
2009年	『カティンの森』	144
2009年	『キャピタリズム マネーは踊る』	145
2009年	『グラン・トリノ』	146
2009年	『沈まぬ太陽』	147
2009年	『スラムドッグ\$ミリオネア』	148
2009年	『戦場でワルツを』	149

149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 134 133 132 131

2009年『誰も守ってくれない』
 2009年『チェンジリング』
 2010年『インビクタス』
 2010年『オーケストラ!』
 2010年『ハート・ロッカー』
 2010年『闇の列車、光の旅』
 2011年『一枚のハガキ』
 2011年『愛しきソナ』
 2011年『インサイド・ジョブ』
 2011年『おじいさんと草原の小学校』
 2011年『黄色い星の子供たち』
 2011年『ゴーストライター』
 2011年『サラの鍵』
 2011年『100,000年後の安全』
 2011年『戦火の馬』
 2011年『戦火のナージャ』
 2011年『太平洋の奇跡』
 2011年『日輪の遺産』
 2011年『マイ・バック・ページ』

168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158 157 156 155 154 153 152 151 150

2012年『かぞくのくに』
 2012年『希望の国』
 2012年『この空の花 長岡花火物語』
 2012年『誰も知らない基地のこと』
 2012年『ル・アープルの靴みがき』
 2012年『ルート・アイリッシュ』
 2013年『遺体 明日への十日間』
 2013年『永遠の0』
 2013年『かぐや姫の物語』
 2013年『風立ちぬ』
 2013年『三姉妹 雲南の子』
 2013年『少年H』
 2013年『セデック・バレ』
 2013年『ハンナ・アーレント』
 2013年『ペコロスの母に会いに行く』
 2013年『もうひとりの息子』
 2013年『約束』
 2013年『我々のものではない世界』
 2014年『アクト・オブ・キリング』

187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175 174 173 172 171 170 169

戦争は、だめだ！

2014年『口笛彼方』
2014年『チスル』
2014年『東京難民』
2014年『日本と原発』
2014年『NO ノー』
2014年『野のななのか』
2015年『アメリカン・スナイパー』
2015年『あん』
2015年『グローリー 明日への行進』
2015年『杉原千敵』
2015年『野火』
2015年『ネパールの首飾り』
2015年『博士と彼女のセオリー』
2015年『母と暮せば』
2015年『ヒトラー暗殺13分の誤算』
2016年『この世界の片隅に』
2016年『サウルの息子』
2016年『ブリッジ・オブ・スパイ』
2016年『スポットライト』

207 206 205 204 202 201 200 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190 189 188

2016年『トランボ』
2017年『明日へ 戦争は罪悪である』
2017年『コスタリカの奇跡』
2017年『スノーデン』
2017年『ドリーム』
2017年『花筐 HANAGATAKI』
2017年『標的の島 風かたか』
2017年『米軍が最も恐れた男』
2017年『わたしは、ダニエル・ブレイク』
2018年『愛と法』
2018年『沖縄スパイ戦史』
2018年『華氏119』
2018年『1987、ある闘いの真実』
2018年『タクシー運転手 約束は海を越えて』
2018年『ペンタゴン・ペーパーズ』
2018年『万引き家族』
2019年『RBG最強の85才』

225 223 222 221 220 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210 209 208

2019年	『i―新聞記者ドキュメント―』	226	2020年	『FUKUSHIMA 50』	243
2019年	『家族を想うとき』	227	2020年	『マルモイ ことば集め』	244
2019年	『The Best of Enemies』	228	2020年	『三島由紀夫 vs 東大全共闘 50年後の真実』	245
2019年	『主戦場』	229	2020年	『リチャード・ジュエル』	246
2019年	『新聞記者』	230	2021年	『ちよつと北朝鮮まで行ってくるけん。』	247
2019年	『ニジノキセキ』	231	2021年	『ブータン 山の教室』	248
2019年	『福島は語る』	232	2021年	『MINAMATA ミナマタ』	249
2020年	『浅田家!』	233	2021年	『水俣曼荼羅』	250
2020年	『海辺の映画館 キネマの玉手箱』	235	2022年	『われ弱ければ 矢嶋樹子伝』	251
2020年	『風の電話』	236	2022年	『スーブとイデオロギー』	253
2020年	『子供たちをよろしく』	238	2022年	『Blue Island 憂鬱の島』	254
2020年	『1917命をかけた伝令』	239	2022年	『長崎の郵便配達』	255
2020年	『なぜ君は総理大臣にならないのか』	241	2022年	『ベルファスト』	256
2020年	『パラサイト 半地下の家族』	242	2022年	『アトランティス』	257

序

映画

映画は通例つくりものである。しかしそれは「花も実もある絵空事」（大林宣彦言）であり、視覚と音声等の複数の感覚に訴える総合芸術であって、それ故に直観的に深く理解することができ、情念を載せることが容易な媒体である。それゆえに、かつて映画は戦意高揚に用いられた。今はそれを逆手に取り、イラク戦争、アフガニスタンの戦乱、9・11、ロシアとウクライナ、日本の防衛費増大と敵基地攻撃能力保持の計画などと、きな臭い世界情勢の中で人々が頭に血を上らせている中、反戦平和を、映画をもって訴える時であると確信する。

反戦

筆者には信じられない。わずか78年前に大侵略戦争で多くの悲劇をもたらした日本において、どうあっても戦争だけはイヤでそれにつながることの芽を摘むのが大切だと考える人がたくさんいた日本において、安保闘争では米国に巻き込まれることこそ平和に背を向けるものであると多くの人々が考えていた日本において、保守と革新に分かれて角を突き合わせて均衡を保っていた日本において、軍事費の倍増が語られ、改憲を認める国民が多数派となり、国政選挙では革新は時代遅れだとはばかりに保守的である度合いを競うような流れとなつて、筆者にはなぜなのか理解できない。戦争中の死の瞬間に、自分の次の世代に平和な世を残したく、戦争につながることは一切いやだ、そう思っていた方々が多くいると思われ、その方々の無念の思いを、100年もたた

戦争は、だめだ！

ないうちに忘れさせてしまうような政治と教育がここ最近行われてきている気がしてならない。筆者は偏向思想の持主なのだろうか。世界の諸問題が難化している現在、自己の防衛に走る為政者があまりに多く、彼らが作る「常識的考え」の方がおかしくはないのだろうか。防衛費増大計画や敵基地攻撃能力の保持の計画も、米国の余剰武器を購入するための仕掛けだったりしないのだろうか。

歴史

筆者は歴史学の専門家ではなく、自分の歴史観を人に押し付けるつもりは毛頭ない。だが、どのような考え方を背景に本書が作成されたかを示しておきたい。

日本は侵略戦争を行った。これだけでいくら謝っても謝り切れないことをしたのだと思っている。これは日本を貶めることではなく、筆者も日本的なものが大好きだし、日本に誇りを持っている。それは平和憲法を持ち、童謡「ふるさと」のような心情で人々が生きる日本に對してだ。そのような国として再出発できるはずだった日本が、戦後の主導権を握るために原爆を使用した米国の都合で、いったん成立した平和憲法に反し、いろいろなごまかしで軍事力を強化し、好むと好まざるとに関わらず、西側陣営の橋頭堡とさせられてきたということこそ、歪んでいるのではないだろうか。お上には逆らわずもいい加減にしないと、大変なことになるのではないかという気がする。大学の世界をはじめとして、間違わないためにボトムアップで物事を考える面倒な民主主義の時代から、支配層の目的のためにトップダウンで効率的に進む独裁的な時代に逆行しつつある（面倒だからと小選挙区制が導入された時点で確信した）。今が歴史の大転換点になりそうな気がしてならない。そう考えると、言いたいことを今言わねば後悔するだろうと思う。

反戦映画

ここで、映画の専門家であれば、反戦映画の定義や、類別について語ることになるが、残念ながら筆者には、その力はない。反戦映画には、戦地の戦闘を描いてその悲惨を訴えるもの、銃後やその後を描いて戦争の影響を訴えるものに大別されるなどと言っても、誰もがすでに知っていることである。筆者が志すのは、本書で取り上げている反戦人権映画の鑑賞をお勧めすることである。マイケル・ムーアのような実力行使はせず、風が吹けば桶屋が儲かる式の構図の中で、風を起こそうとしているに過ぎない。しかし風も起こさなければ自分自身でなくなる、という切迫感がある。

ということ、本書では235本の反戦映画、人権映画を収録している。配列は時代順で、こうした映画の流れがわかるようにしてあるが、戦後の作品が主体である。日本映画もあれば外国映画もあり、反戦映画もあれば人権映画もある。メジャー作もあれば自主上映しかできない作品もある。儲かる映画もあれば儲からない映画もある。声高な映画もあれば静かな映画もある。しかし本書で取り上げている諸作はどれも、映画としての味わいと芸術性を持ち、もっと評価され、尊重されるべき作品だという点では共通している。筆者も小学生の頃は、最高の映画とはカーアクションだと思っていた。いまだに成長途上の筆者ではあるが、これら珠玉の作品たちと出会えたことに喜びを感じる。ことが、ようやくこの頃でできるようになってきた。目の前にあるものだけで生きていくのではなく、自分の知らない世界に触れていくことが、この世ではほんの一瞬しか存在できないことに對する自分なりの抵抗であり、自分の生きた証であり、天文現象等でいつか終わりを迎えるかもしれない人類の歴史が輝かしいものであるための必要条件として、互いに学び合う知恵というものに、ささやかな貢献をしようと志した次第である。ぜひ本書に並ぶ諸作に触れてみていただきたい。

戦争は、だめだ！

性的虐待 207
 戦意高揚 11/16/20/64/235/244
 選挙 11/12/89/93/96/189/196/210/214/215/219
 全共闘 35/168/245 L/245
 全国農村映画協会 34
 占領 23/26/64/74/82/108/134/160/189/215
 ゾルゲ事件 18 P197/206/260
 ソ連 18/39/40/82/124/144/153/165/172/193/
 滝川事件 18
 チャップリン 14/19/35/36/216
 チャン・イーモウ 68/90 P179/190/254
 中国 18/46/68/70/90/95/108/113/137/146/172/
 チェコ事件 124
 チェコスロバキア 25
 徴兵 22/28/62/67
 チョムスキー 98/103/108
 チョルノービリ 87
 知覧 75/94
 チリ 48/57/82/107/166/192
 天安門事件 254
 ドイツ 15/20/23/36/39/40/42/58/64/75/78/87/
 97/111/134/141/144/160/165/182/197/
 東京国際 184/217/257 L202/205/206/221/239
 特高 137/178/209
 特攻 75/94/116/118/128/176
 長崎 29/41/47/66/129/183/188/201/255
 ナチス 20/23/36/58/64/78/87/89/97/111/141/
 160/162/180/202/205/219
 名張毒ぶどう酒事件 185
 難民 121/134/173/186/190/250
 日本軍山西省残留問題 113
 日本人妻 247
 日本朝鮮にじの会 247
 ニューヨーク 14/35/36/58/59/76/98/131/196/
 人間魚雷回天 118/133 L222
 ネパール 199
 ハーグ密使事件 53
 バプロ・ネルーダ 83
 パレスチナ 184/186/206/232
 ハンガリー動乱 124
 ハンセン病 31/127/195
 東日本大震災 163/170/171/175/190/233/236
 ヒトラー 14/36/40/111/141/202
 ビンチェト軍事政権 57/83/192
 非米活動委員会 35/208
 ビュルガーブロイケラー爆発事件 202 P235/236
 広島 25/63/69/106/128/129/131/133/201/204
 貧困 28/34/41/50/52/103/105/216/219/238
 ファタハ 186
 プータン 248
 福島 51/163/170/191/232/236/243
 不法移民 155/173
 ブラジル 29/107/156
 ブラハの春 124
 フランス 20/48/54/64/72/74/126/153/160/162/
 242/255

米軍 26/40/54/59/62/80/98/109/115/119/123/
 125/128/129/140/154/166/172/174/189/
 194/198/206/210/214/215/218/243/260
 米国 11/12/19/20/23/26/33/35/38/39/40/48/
 54/57/59/61/62/71/73/81/85/86/88/91/96
 /98/101/103/104/108/114/115/117/121/
 122/125/126/128/129/130/131/145/146/
 155/158/161/166/169/172/187/194/196/
 197/206/208/210/211/212/214/219/222/
 225/228/229/249
 米国アカデミー 3/20/38/42/45/48/57/58/59/62/
 67/71/74/78/81/82/86/89/91/97/103/120
 /121/132/136/141/148/149/150/154/158/
 177/207/242/254
 米国人 33/54/57/58/98/104/115/128/129/131/
 155/166/206/225/229/249
 ベイルート 23/57/72/149
 平和 11/12/20/22/25/27/39/50/53/59/72/75/76
 /108/121/129/131/137/142/149/171/196/
 210/214/231/235/246/251/255/260
 ベトナム 62/74/98/222
 ベトナム戦争 44/54/62/71/73/222
 ベルー 107
 ベルリン 50/60/62/68/90/111/125/132/206/254
 ボルボト派 59
 香港 70/217/254/
 本庄事件 21
 ホームレス 131/190
 ボーランド 58/78/97/144
 ボーランド侵攻 36/144
 ホロコースト 42/78
 マイケル・ムーア 13/97/101/103/126/145/158/
 マウマウ団 159 L219/229
 前川喜平 100/238
 マケドニア 84/85
 マンデラ 65/142/152
 水俣 232/249/250
 無戸籍 105/217
 霧社事変 181
 メキシコ 57/155/206
 メルボルンの流血戦 124
 夜間中学 100
 山本薩夫 21/30/34/52/99
 U2 撃墜事件 206
 ユダヤ 20/36/42/58/64/78/79/89/97/98/141/
 149/153/160/162/180/182/184/197/205
 よど号ハイジャック事件 168
 四・三事件 189/253
 四・二四 231
 ルワンダ 121/134
 冷戦 40/117/206
 レバノン 72/108/149/186
 連合赤軍 139/140/168
 労働者 20/30/52/96/174/216
 六七暴動 254
 ロシア 2/11/40/46/82/87/165/193/211/256/257

戦争は、だめだ！

★索引★ *映画の制作国名は含めていない。

IRA 256

アイルランド 122/174/256

アウシュヴィッツ 58/205

赤狩り/レッドバージ 20/21/35/117/187/208

あさま山荘事件 139/168

アジェンデ政権 57/83/192

アバルトヘイト 65/142/152

アフガニスタン 125

雨傘運動 254

アメリカ 215

アメリカン 86/145/194

アルカイダ 125

アルゼンチン 48/138

安重根 53/70

慰安婦 108/229

硫黄島 114/115/151/152/166/194/201

イスラエル 78/98/149/182/184/186/206

イスラム 42/98/149/161

イタリア 23/72/83/89/163/172

今井正 22/27/31/33

イム・グォンテク 77/79

イラク 11/46/97/98/103/154/174/194/210

イラン 76/125

インドネシア 187

ウォーターゲート事件 222

ウクライナ 2/11/87/256/257

英国 14/20/35/40/42/59/65/66/70/120/122/125

/126/134/141/148/159/161/164/172/174/

186/202/216/227/254/282

エコマディア 87

FBI 73/246

冤罪 81/127/185/246

大林宣彦 11/56/171/193/213/235/236/238/260

小川淳也 241

└/261

沖縄 27/46/49/108/109/172/201/214/215/218/

オリバー・ストーン 62/71/73/211

└/249

温暖化 130

階級 20/37/44/70/86/93

介護 100/183/227

核 40/44/129/163/191/206

カティンの森事件 144

からゆきさん 50

環境汚染 91/257

韓国 77/82/92/94/96/108/119/189/220/221/

229/231/242/244/253/

監視 26/48/92/132/145/169/211/218/230/247

カンヌ 3/23/38/48/54/57/67/82/85/89/95/97/

101/103/105/122/205/216/223/242

帰還兵 62/154/194/257

帰国事業 157/169/247/253

北朝鮮 46/53/98/157/169/189/231/247/253

基地 98/108/116/125/139/172/210/214/215/

木下恵介 16/17/18/19/28/32/37

└/260

君が代 217

9.11 11/98/101/103/108/126/131/207/211/219

キューバ 40/44/71/73/88/107/125/126/206

共産主義 18/35/83/117/139/153

ギリシア 48/57/85/186

キング牧師 45/152/196/212

近代映画協会 19/25/63

金大中(事件) 96/189/221

グアタナモ米軍基地 125

空襲 17/22/99/123/125/171/180/198/204/252

九月三十日事件 187

熊井啓 50/60

組合 21/30/46/138/147

黒木和雄 51/66/99/106/116/201

黒澤明 18/24/26/29/41/137

KKK 228

ケネディ 71/73/161/206

ゲバラ 83/107

原爆 12/25/26/29/43/64/66/69/106/118/129/

133/201/204/255/260

原発 51/87/163/170/175/191/193/232/236/243

憲法 12/19/98/108/123/125/129/196/210/260

ケン・ローチ 122/174/216/227

光州事件 220/221

神山征二郎 27/75

黒人 33/38/45/61/65/88/142/152/196/212/219/

国連 84/121/134/210

└228

コストリカ 210

再審 81/127/185

在日コリアン 94/100/157/169/231/253

サイパン島 166

さくら隊 25/63/235

佐々部清 118/133/167/190

サーロー節子 255

サンダンス 155

サンディニスタ民族解放戦線 210

サンフランシスコ 39

CIA 73/108/161/172/211

GHQ 25/26/60/106/108/231

自衛隊 46/96/170/175/214/226/243

死刑 18/64/127/182/185/190/206

失業 43/101/138/216

児童売春 143

資本主義 145/153

社会主義 57/126/192

銃社会 101/103/126

収容所 23/58/78/80/89/97/125/131/141/144/

153/160/162/165/182/197/202/205

粛清 79/82/165

新藤兼人 19/25/63/123/156

スカルノ 187

杉原千蔵 197

スターリン 82/165

スハルト 187

スビルバーグ 61/78/82/88/114/164/206/222

スペイン 88/93

スペイン内戦 93

生体解剖事件 60

後書き

筆者は小学生の頃から平和主義者だったようです。学校でからかわれてもニコニコしていました。人と争うのが嫌いだったのです。大学生の頃、一般教養の憲法の講義に感動し、政治や人権に関心を持ち始めました。この講義がなかったら、なぜ米国が原爆を投下したか、なぜソ連が終戦直前に参戦したか、なぜ米国は天皇制を残すことを許したか、なぜ米軍基地が日本にあるのか、なぜ安保闘争があったのか、そんなことを全く考えもしない人生を送っていたかもしれません。ナイーブに武器があるから戦争になると考える人間であり、軍事力の均衡を現実的な平和の手段として肯定すべきだとはどうしても思えないタイプの人間です。何を子供みたいなことを言っているんだと言われそうですが、故大林宣彦監督は、子供のときに大人に関していやだと思っていたことを、大人になってもそのまま思い続けているのは、子供の頃の自分に申し訳が立たないことはしたくないからだ、という趣旨のことをおっしゃっていました。筆者もそれに倣う青臭い人間でいたいと思っています。実は筆者が二十代になってから映画を見るようになったのは、その大林監督が尾道3部作で恥ずかしげもなく、瑞々しく光り輝く青春を青臭く描いているのに感じ入ったからです。人が発するそのような光を大切に扱うということは、「○○のためには多少の人命が失われても仕方がない」とする戦争とは、およそ対極にある態度だと思います。ということで、反戦平和と人を大切にする映画との組み合わせは、それこそ筆者が取り組まないでどうするというテーマとなりました。もともと英語屋であり、取り組むことが他にもいろいろあるために、ひとつひとつは些細な成果でしかないのですが、些細ながら塵も積もれば山となるということで、ささやかながら、自分にある

ひとつの部分の集大成のつもりで制作しました。未見の作品、取り上げられなかった作品には本当に申し訳ないです。例えば、脱稿直前に地元図書館で、日本軍と地元の少年兵を描くタイ映画の貴重な上映があったのですが、本務校の業務の関係で、どうしても見るできませんでした。また、最近の香港の情勢を扱った作品がかなりあるのに、滑り込みで1本見られたのみです。その他常識として見ておくべき数々の作品を見逃しています。努力不足をお詫びしますが、そこは多趣味で、映画館にかかる映画が首都圏よりもずっと少ない福岡在住の筆者としての限界です。

最後に、映画の喜びを教えてください。故大林宣彦監督、その大林映画のロケ地巡りと2冊の共著を世に出すことでお世話になった哲学者荒木正見先生、本来の研究分野以外のことばかりに夢中になる弟子に寛容に接してください。恩師東京都立大学名誉教授中島平三先生、映画の話題や映画の授業についてよき刺激となってくれている九州大学での同僚志水俊広先生と辻野裕紀先生、九州大学での映画授業に御協力をいただいている福岡アジア映画祭主宰者で映画評論家の前田秀一郎氏、本書のもととなる記事を掲載し続けてくださっている『反戦情報』主宰の永田信男氏、そして母校の大学を再度卒業し、今もその先を目指して頑張り刺激を筆者に与え続け、一部の原稿の点検にも協力してくれた妻鈴木久仁子に本書を捧げます。そして何より、本著作の出版を快諾し、編集作業で大いに汗をかいてくださった権歌書房の東保司氏に、最大限の感謝を申し上げます。思います。また本書が、お読みになる方々に少しでも得るものがある書であることを祈りながら、しめくくりと致します。

著者 鈴木右文（すずき・ゆうぶん）

1964年千葉県に生まれる。

東京都立大学大学院人文科学研究科英文学専攻博士課程所要年限在学・所要単位取得の上中退。
現在九州大学大学院言語文化研究院教授。

本来の専門は生成文法による現代英語の統語分析。しかし諸般の事情によりある時から、コンピュータによる英語教育実践とともに、特にケンブリッジ大学英語・学術研修にライフワークとして取り組む。

映画、旅行、鉄道等多趣味の中、映画では九州大学基幹教育の授業で「映画の世界」を担当、共著書に『尾道を映画で歩く』『尾道学と映画ファイルドワーク』（いずれも中川書店）がある。

2001年から『反戦情報』誌に反戦人権映画に関するコラムを担当して現在に至る。

戦争は、だめだ！
ISBN978-4-434-32497-0 C3074

発行日 2023年 6月 30日 初版第1刷

著 者 鈴木 右文

発行者 東 保司

発 行 所

とうかしょぼう

權 歌 書 房

〒811-1365 福岡市南区皿山4丁目14-2

TEL 092-511-8111 FAX 092-511-6641

E-mail: e@touka.com <http://www.touka.com>

発売元 星雲社（共同出版社・流通責任出版社）